

平成29年度 地域貢献研究助成費 実績報告書

平成30年3月27日

報告者	学科名	保健福祉学科	職名	教授	氏名	佐藤和順																
研究課題	「積極的なかかわり」を視点とした保育の質の指標化及び変容に関する研究																					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担																	
	代表	佐藤和順	保健福祉学科・教授		幼児教育	研究の総括																
	分担者	柏まり	保健福祉学科・准教授		乳児保育	調査の実施・分析補助																
研究実績の概要	<p>本研究の目的は、以下の通りである。</p> <p>【目的1】 保育の質をはかる指標の作成</p> <p>【目的2】 作成した指標により良い保育とは何かを認識し、事前学習等を行うことで、保育者自身の意識に変化が起こり、行動も変容することの検証</p> <p>【目標1】に関連し、米国国立小児保健・人間発達研究所 (NICHD) The Positive Caregiving Checklist及びSSTEW (Sustained Shared Thinking and Emotional Well-being) を基盤にわが国の保育の実情を勘案して、5分類17項目の保育の質をはかる指標を作成した。</p>																					
	<p style="text-align: center;">表1：保育の質をはかる指標の一部</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類</th> <th>項目</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">積極的なかかわり</td> <td>積極的な態度を示す</td> </tr> <tr> <td>ほめる</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">信頼、自信、自立の構築</td> <td>自己制御と社会的発達の支援</td> </tr> <tr> <td>小グループ・個別のかかわり、保育者の位置取り</td> </tr> <tr> <td>社会情緒的な安定・安心</td> <td>社会情緒的な安定・安心</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">言葉・コミュニケーションを支え、広げる</td> <td>子ども同士の会話を支える</td> </tr> <tr> <td>感受性豊かな応答</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">学びの評価と批判的思考を支える</td> <td>好奇心と問題解決の支援</td> </tr> <tr> <td>学びと批判的思考を支え、広げるための評価の活用</td> </tr> </tbody> </table>						分類	項目	積極的なかかわり	積極的な態度を示す	ほめる	信頼、自信、自立の構築	自己制御と社会的発達の支援	小グループ・個別のかかわり、保育者の位置取り	社会情緒的な安定・安心	社会情緒的な安定・安心	言葉・コミュニケーションを支え、広げる	子ども同士の会話を支える	感受性豊かな応答	学びの評価と批判的思考を支える	好奇心と問題解決の支援	学びと批判的思考を支え、広げるための評価の活用
分類	項目																					
積極的なかかわり	積極的な態度を示す																					
	ほめる																					
信頼、自信、自立の構築	自己制御と社会的発達の支援																					
	小グループ・個別のかかわり、保育者の位置取り																					
社会情緒的な安定・安心	社会情緒的な安定・安心																					
言葉・コミュニケーションを支え、広げる	子ども同士の会話を支える																					
	感受性豊かな応答																					
学びの評価と批判的思考を支える	好奇心と問題解決の支援																					
	学びと批判的思考を支え、広げるための評価の活用																					

【目的2】に関連して、作成した指標を基に保育の変容に関する検証を実施した。研究対象園の16名の保育者を担当クラスの年齢別に分け、保育の質に関する指導プログラムに参加する教師を実験群、参加しない教師を統制群とした。それぞれ保育の様子を30分間ビデオカメラで撮影。保育終了後に撮影したビデオの中で、本研究で作成した指標に該当すると考えられる保育を行ったかについて評価し、得点を付し、得点の変化を検証。第1回指導プログラム以降を介入期とし、ベースライン期、介入期をあわせて計15回の観察を実施。図1の通り得点変化があり、指導プログラムには効果があると考えられた。

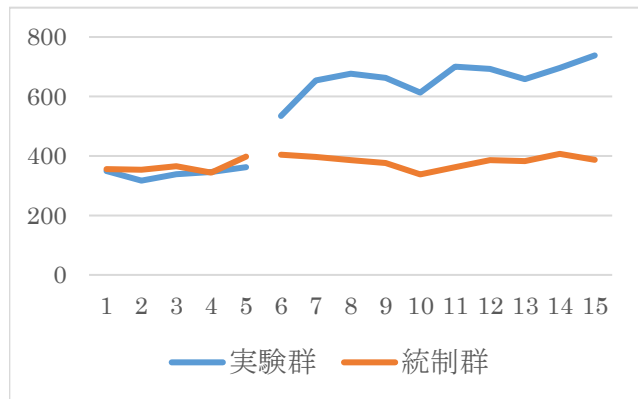
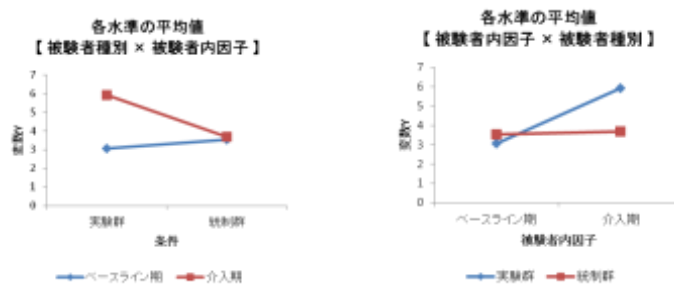


図1: 応用行動分析 AB デザインによる得点の変化

図1の通り得点変化があり、指導プログラムには効果があると考えられた。加えて、独立変数を被験者種別（実験群・統制群）の2群（被験者間要因）と「観測時期」（ベースライン期・介入期）（被験者内要因）とし、従属変数を「保育の質に関する指標」とした2要因分散分析（混合計画）で指導プログラムの効果を検証した。

研究実績の概要



■分散分析結果

変数名	SS	MS	MSe	偏η ²	95%CI	F値	df1	df2	p値
被験者種別	6.175	6.175	0.435	.504	.099, .701	14.206	1	14	.002 **
観測時期	18.129	18.129	0.046	.966	---	392.067	1	14	.000 **
被験者種別*観測時期	14.619	14.619	0.046	.958	---	316.153	1	14	.000 **

■単純主効果

スライス	変数名	SS	MS	MSe	偏η ²	95%CI	F値	df1	df2	p値
測定時期=ベースライン期	被験者種別	0.896	0.896	0.240	.210	.000, .492	3.725	1	28	.064 *
	被験者種別	19.898	19.898	0.240	.855	.691, .902	82.748	1	28	.000 **
測定時期=介入期	被験者種別=統制群	0.094	0.094	0.046	.226	---	2.040	1	14	.175
	被験者種別=実験群	32.653	32.653	0.046	.990	---	706.179	1	14	.000 **

以上から良い保育とは何かを認識し、事前学習等を行うことで、保育者自身の意識に変化が起こり、行動も変容することが確認された。保育の質の向上は県内の保育現場でも喫緊の課題とされているが、具体的指標、方法等は示されておらず、本研究は地域の保育の質の向上に寄与する知見となりうると考える。

成果資料目録